

大学院口腔科学教育部研究奨励賞研究成果報告書

口腔科学教育部口腔科学専攻 4年
口腔顎顔面矯正学分野 渡邊 正彦

研究課題名 咀嚼訓練食品を用いた顎変形症患者に対する新規リハビリテーションの確立

1. 研究目的と成果内容

顎変形症患者では、術後に咀嚼障害を認めることが多く、その原因として、不正咬合による器質的な咀嚼障害と手術の侵襲による術後の機能低下が報告されている。術後の機能低下に関して、術後約3か月で術前と同程度の咬合力となり、術後約6か月で術前の体重まで回復することを報告している。そのため、通常の食事がとれるようになるまでには約3か月を要し、その間に食事摂取量の減少に伴う栄養状態の悪化が生じていると考えられる。したがって、術後早期に栄養状態を改善するためには、術後早期に特化したリハビリテーション法の確立が必要不可欠である。顎変形症患者に対する術後リハビリテーションは過去にも行われており、早期に理学療法を用いたリハビリテーションを受けた患者群は、受けなかった患者群と比較して下顎限界運動量が有意に増加したと報告している。また、術後3か月以降に実施するガムなどの訓練食品を用いたリハビリテーションは、咀嚼機能の回復、改善に有効であることも報告されている。このような背景のもと、本研究では高齢者の摂食嚥下リハビリテーションのために開発された市販咀嚼訓練食品を用いて、顎変形症患者の咀嚼機能のより早期の回復を目指した新規リハビリテーション法を開発することを目的とし、術後リハビリテーションの有効性の検討を行った。

その結果、非訓練群と比較して訓練群では手術前から術後3か月にかけて咀嚼能力が有意に増加し、最大咬合力についても増加していた。次に、咀嚼能力について訓練群、非訓練群の術後10日から術後3か月までの期間、経時的に調べたところさらに長期経過を追うことで訓練効果が得られる可能性が示唆された。

2. 自己評価

本研究によって、咀嚼訓練食品による術後早期の訓練が顎変形症患者の咀嚼機能を迅速に回復させる可能性が示唆された。しかし、サンプルサイズが小さいことから今後、被験者数を増やし、最適な解析方法を検討する必要がある。

3. 学会発表

- ・骨格性下顎前突症患者における筋機能の特徴

渡邊 正彦, 川合 暢彦, 柴田 愛実, 田中 栄二

第62回日本顎口腔機能学会 口演発表 2019年4月13日 愛知

4. 論文

現在、投稿準備中。